

桃太郎

楠山正雄

青空文庫

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。まいにち、おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗濯せんたくに行きました。

ある日、おばあさんが、川のそばで、せつせと洗濯せんたくをしていますと、川上かわかみから、大きな桃ももが一つ、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。

ドンブラコッコ、スッコッコ。」

と流ながれて来きました。

「おやおや、これはみごとな桃ももだこと。おじいさんへのおみやげに、どれどれ、うちへ持もつて帰かえりましょう。」

おばあさんは、そう言いいながら、腰こしをかがめて桃ももを取とろうとしましたが、遠とおくつて手てがとどきません。おばあさんはそこで、

「あつちの水みづは、かあらいぞ。

こつちの水は、あまいぞ。

かあらい水は、よけて来い。

あまい水に、よつて来い。

と歌いながら、手をたたきました。すると桃はまた、

「ドンブラコッコ、スッコッコ。」

ドンブラコッコ、スッコッコ。」

といいながら、おばあさんの前へ流れて来ました。おばあさんはここにこしながら、

「早くおじいさんと二人で分けて食べましょう。」

と言つて、桃をひろい上げて、洗濯物といっしょにたらいの中に入れて、えつちら、

おつちら、かかえておうちへ帰りました。

夕方になつてやつと、おじいさんは山からしばを背負つて帰つて来ました。

「おばあさん、今帰つたよ。」

「おや、おじいさん、おかいんなさい。待っていましたよ。さあ、早くお上がんなさい。

いいものを上げますから。」

「それはありがたいな。何だね、そのいいものというのは。」

こういいながら、おじいさんはわらじをぬいで、上に上がりました。その間に、おばあさんは戸棚とだなの中からさつききの桃ももを重おもそうにかかえて来て、

「ほら、ごらんなさいこの桃ももを。」
と言いいました。

「ほほう、これはこれは。どこからこんなみごとな桃ももを買かって来たき。」

「いいえ、買かって来たきのではありません。今日きょう川かわで拾ひろって来たきのですよ。」

「え、なに、川かわで拾ひろって来たき。それはいいよいめずらしい。」

こうおじいさんは言いいながら、桃ももを両手りょうてにのせて、ためつ、すがめつ、ながめていますと、だしぬけに、桃ももはほんと中から二つに割われて、

「おぎやあ、おぎやあ。」

と勇いそましいうぶ声こえを上げながら、かわいらしい赤あかさんが元げん気きよくとび出だしました。

「おやおや、まあ。」

おじいさんも、おばあさんも、びっくりして、二人ふたりいっしょに声こえを立てたました。

「まあまあ、わたしたちが、へいぜい、どうかして子供こどもが一人ひとりほしい、ほしいと言いつていたものだから、きつと神かみさまがこの子をさずけて下くださったにちがいない。」

おじいさんも、おばあさんも、うれしがって、こう言いました。

そこであわてておじいさんがお湯をわかすやら、おばあさんがむつきをそろえるやら、大さわぎをして、赤さんを抱き上げて、うぶ湯をつかわせました。するといきなり、

「うん。」

と言いながら、赤さんは抱いているおばあさんの手をはねのけました。

「おやおや、何という元気のいい子だろう。」

おじいさんとおばあさんは、こう言つて顔を見合わせながら、「あッは、あッは。」とおもしろそうに笑いました。

そして桃の中から生まれた子だということで、この子に桃太郎という名をつけました。

二

おじいさんとおばあさんは、それはそれはだいじにして桃太郎を育てました。桃太郎はだんだん成長するにつれて、あたりまえの子供にくらべては、ずっと体も大きいし、力がばかに強くつて、すもうをとつても近所の村じゅうで、かなうものは一人も

ないくらいでしたが、そのくせ気だてはごくやさしくつて、おじいさんとおばあさんによく孝行をしました。

桃太郎は十五になりました。

もうそのじぶんには、日本の国中で、桃太郎ほど強いものはないようになりました。桃太郎はどこか外国へ出かけて、腕いっぱい、力だめしをしてみたくまりました。するとそのころ、ほうぼう外国の島々をめぐつて帰つて来た人があつて、いろいろめずらしい、ふしぎなお話をした末に、

「もう何年も何年も船をこいで行くと、遠い遠い海のはてに、鬼が島という所がある。悪い鬼どもが、いかめしいくろがねのお城の中に住んで、ほうぼうの国からかすめ取ったとうとたからもの貴い宝物を守っている。」

と言いました。

桃太郎はこの話をきくと、その鬼が島へ行つてみたかつて、もう居ても立つてもいられなくなりしました。そこでうちへ帰るとさつそく、おじいさんの前へ出て、

「どうぞ、わたくしにしばらくおひまを下さい。」

と言いました。

おじいさんはびつくりして、

「お前まえどこへ行くのだ。」

と聞ききました。

「鬼おにが島しまへ鬼おにせいばつに行いこうと思おもいます。」

と桃太郎ももたろうはこたえました。

「ほう、それはいさましいことだ。じゃあ行いつておいで。」

とおじいさんは言いいました。

「まあ、そんな遠えんぼう方ほうへ行くのでは、さぞおなかがおすきだろう。よしよし、おべんとう

をこしらえて上げあげましょう。」

とおばあさんも言いいました。

そこで、おじいさんとおばあさんは、お庭にわのまん中に、えんやら、えんやら、大きな白うすを持ち出だして、おじいさんがきねを取とると、おばあさんはこねどりをして、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ。」

と、おべんとうのきびだんごをつきはじめました。

きびだんごがうまそうにでき上あがると、桃太郎ももたろうのしたくもすっかりでき上あがりました。

桃太郎はお侍の着るような陣羽織を着て、刀を腰にさして、きびだんごの袋をぶら下げました。そして桃の絵のかいてある軍扇を手に持つて、

「ではおとうさん、おかあさん、行つてまいります。」

と言つて、ていねいに頭を下げました。

「じゃあ、りつぱに鬼を退治してくるがいい。」

とおじいさんは言いました。

「気をつけて、けがをしないようにおしよ。」

とおばあさんも言いました。

「なに、大丈夫です、日本一のきびだんごを持つているから。」と桃太郎は言つて、

「では、ごきげんよう。」

と元氣な声をのこして、出ていきました。おじいさんとおばあさんは、門の外に立つて、いつまでも、いつまでも見送っていました。

桃太郎はずんずん行きますと、大きな山の上に来ました。すると、草むらの中から、

「ワン、ワン。」と声をかけながら、犬が一匹かけて来ました。

桃太郎がふり返ると、犬はていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ、鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

犬はきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとから、ついて行きました。

山を下りてしばらく行くと、こんどは森の中にはいりました。すると木の上から、「キ

ヤツ、キヤツ。」とさけびながら、猿が一匹、かけ下りて来ました。

桃太郎がふり返ると、猿はていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

猿もきびだんごを一つもらって、あとからついて行きました。

山を下りて、森をぬけて、こんどはひろい野原へ出ました。すると空の上で、「ケン、」と鳴く声かして、きじが一羽とんで来ました。

桃太郎がふり返ると、きじはていねいに、おじぎをして、

「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ鬼せいばつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

「日本一のきびだんごさ。」

「一つ下さい、お供（とも）しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い（こ）。」

きじもきびだんごを一つもらつて、桃太郎（ももたろう）のあとからついて行きました。

犬（いぬ）、猿（さる）、きじと、これで三（さん）にんまで、いい家来（けらい）ができたので、桃太郎（ももたろう）はいよいよ

勇（いさ）み立（た）つて、またずんずん進（すす）んで行きますと、やがてひろい海（うみ）ばたに出了（で）ました。

そこには、ちようどいいぐあいに、船（ふね）が一（い）そうつないでありました。

桃太郎（ももたろう）と、三（さん）にんの家来（けらい）は、さつそく、この船（ふね）に乘（の）り込みました。

「わたくしは、漕（こ）ぎ手（て）になりましょう。」

こう言（い）つて、犬（いぬ）は船（ふね）をこぎ出（だ）しました。

「わたくしは、かじ取（と）りになりましょう。」

こう言（い）つて、猿（さる）がかじに座（すわ）りました。

「わたくしは物見（ものみ）をつとめましょう。」

こう言（い）つて、きじがへさきに立（た）ちました。

うらかないお天（てん）氣（き）で、まっ青（さお）な海（うみ）の上（うへ）には、波（なみ）一つ立（た）ちませんでした。稲妻（いなづま）が走（はし）

るようだといおうか、矢（や）を射（い）るようだといおうか、目のまわるような速（はや）さで船（ふね）は走（はし）つて行

きました。ほんの一時間も走ったと思うころ、へさきに立つて向こうをながめていたきじが、「あれ、あれ、島が。」ときげびながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて、空にとび上がったと思うと、スウツとまっすぐに風を切つて、飛んでいきました。

桃太郎もすぐきじの立つたあとから向こうを見ますと、なるほど、遠い遠い海のはてに、ぼんやり雲のような薄ぐろいものが見えました。船の進むにしたがつて、雲のように見えていたものが、だんだんはつきりと島の形になつて、あらわれてきました。

「ああ、見える、見える、鬼が島が見える。」

桃太郎がこういうと、犬も、猿も、声をそろえて、「万歳、万歳。」ときげびました。

見る見る鬼が島が近くなつて、もう硬い岩で畳んだ鬼のお城が見えました。いかめしくろがねの門の前に見はりをしている鬼の兵隊のすがたも見えました。

そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまつて、こちらを見ていました。

こうして何年も、何年もこいで行かなければならないという鬼が島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのです。

四

桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

見はりをしていた鬼の兵隊は、その見なれないすがたを見ると、びつくりして、あわてて門の中に逃げ込んで、くろがねの門を固くしめてしまいました。その時犬は門の前に立って、

「日本の桃太郎さんが、お前たちをせいばいにおいでになったのだぞ。あけろ、あけろ」

とどなりながら、ドン、ドン、扉をたたきました。鬼はその声を聞くと、ふるえ上がって、よけい一生懸命に、中から押さえていました。

するときが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつきまわりましたから、鬼はへいこうして逃げ出しました。その間に、猿がするすると高い岩壁をよじ登っていつて、ぞうさなく門を中からあけました。

「わあッ。」とときの声を上げて、桃太郎の主従が、いさましくお城の中に攻め込んでいきますと、鬼の大將も大ぜいの家来を引き連れて、一人一人、太い鉄の棒をふ

りまわしながら、「おう、おう。」ときげんで、向かってきました。

けれども、体が大きいばかりで、いくじのない鬼どもは、さんざんきじに目をつつかれた上に、こんどは犬に向こうずねをくいつかれたといつては、痛い、痛い逃げまわり、猿に顔を引つかかれたといつては、おいおい泣き出して、鉄の棒も何もほうり出して、降参してしまいました。

おしまいまでがまんして、たたかっていた鬼の大将も、とうとう桃太郎に組みふせられてしまいました。桃太郎は大きな鬼の背中に、馬乗りにもたがって、

「どうだ、これでも降参しないか。」

といつて、ぎゆうぎゆう、ぎゆうぎゆう、押さえつけました。

鬼の大將は、桃太郎の大力で首をしめられて、もう苦しうたまりませんから、大つぶの涙をぼろぼろこぼしながら、

「降参します、降参します。命だけはお助け下さい。その代わりに宝物をのこらずさし上げます。」

こう言つて、ゆるしてもらいました。

鬼の大將は約束のとおり、お城から、かくれみのに、かくれ笠、うちでの小づち

に如意宝珠、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、世界でいちばん貴い宝物を山のようももたろうに車くるまに積つんで出だしました。

桃太郎はたくさんの宝物たからものをのこらず積つんで、三にんの家来けらいといっしよに、また船ふねに乗りのました。帰かえりは行きよりもまた一そう船ふねの走はしるのが速はやくつて、間まもなく日本にほんの国くにに着つきました。

船ふねが陸おかに着つきますと、宝物たからものをいっばい積つんだ車くるまを、犬いぬが先さきに立たつて引ひき出だしました。きじが綱つなを引ひいて、猿さるがあとを押おしました。

「えんやらさ、えんやらさ。」

三にんは重おもそうに、かけ声こゑをかけかけ進すすんでいきました。

うちではおじいさんと、おばあさんが、かわるがわる、

「もう桃太郎ももたろうが帰かえりそうなものだが。」

といいいい、首くびをのぼして待まっていました。そこへ桃太郎ももたろうが三にんのりっぱな家来けらいに、ぶんどりの宝物たからものを引ひかせて、さもとくいらしい様子ようすをして帰かえつて来きましたので、おじいさんもおばあさんも、目はなも鼻はなもなくして喜よろこびました。

「えらいぞ、えらいぞ、それこそ日本にっぽん一いちだ。」

とおじいさんは言いました。

「まあ、まあ、けががなくなつて、何よりさ。」

とおばあさんは言いました。

桃太郎は、その時犬と猿ときじの方を向いてこう言いました。

「どうだ。鬼せいぼつはおもしろかつたなあ。」

犬はワン、ワンとうれしそうにほえながら、前足で立ちました。

猿はキヤツ、キヤツと笑いながら、白い歯をむき出しました。

きじはケン、ケンと鳴きながら、くるくると宙返りをしました。

空は青々と晴れ上がって、お庭には桜の花が咲き乱れていました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

※「そのお城《しろ》のいちばん高《たか》い」「こうして何年《なんねん》も」の行頭が下がっていないのは底本のままです。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月27日作成

2013年10月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桃太郎

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>